

釋迦牟尼と女性

坂口龍道

釋迦牟尼とは釋迦種族中の牟尼即ち覺者又は智者と云ふ義で、後世單に釋迦と呼稱するは牟尼を略して云ふ言葉である。牟尼は又獨覺とも不動とも翻する。經に曰く。

「我今已起出一切衆生表微妙深遠法我今已具知三毒五慾境永斷無餘習如蓮在水不染濁水泥自悟八正道無師等侶以清淨智慧降伏大力魔今得成正覺爲天人師身口意滿足故號牟尼」

こ。これ牟尼の意義を解説するものである。又釋迦牟尼を稱して佛陀 Buddha と云ひ、又路伽那他 Lokanātha 即ち譯して世尊と呼び、又たゞ如來 Tathāgata と稱し、又、釋迦如來 Sakya-tathāgata と呼稱する。みなこれ崇敬讚美の語である。女性とは何か。善か、惡か、魔か、神か。姑らくこれを大聖佛陀に聽かう。

一

釋迦牟尼の母は其の名を摩訶摩耶 makāmāyā と云ひ、普通に略して單に摩耶 māyā と云ふ。善覺長者の女である。「華嚴經」中にこの女性の性格を記して云ふ。

摩耶年少にして盛満具足相好、未だ曾て孕育せざりし也、端正雙びなく姿色妍美、猶彩畫の如し、諸々の過惡なく言ふ所誠諦にして妙音の詞を出し身心恬和、罪なく惱なく、亦嫉妬なく、語は必ず時に應じ、惠施を行ふを樂み、……所作質直にして曲れることなし、詔なく誑なく慚あり愧あり、心性安く靜かにして善く衆藝を解せり、家庭に……

處して寶女の如く亦た化女の如く又天女に似たり。

ミ。果してかくの如き清潔無垢天女に似たる美人であつかは聊か疑問であるが、賢妃の聞え高かりし事は言ふまでもない。ヤソの賢母マリヤに比せらるべきこの女性、而して世界の大哲人を生めりしこの女、又尋常の女性に非ざりし事は無論のこゝ、佛教久遠の女性とも見るべきものは正にこの人であるミ稱してよい。

傳に依れば摩耶は産後の経過頗る悪しく太子を生み七日にして逝去した。然れども太子は姨母波闍波提 mahāprajāpatī の手で養育された。

この女は又愛に富み才慧明敏にして美しかつた。一爾時太子誕生し適に七日にして太子の摩耶遂に即ち命終る、是に於て淨飯王即ち釋種を喚びし今この太子嬰孩にして母を失ふ、乳哺の寄まさに誰にか付屬すべき、誰かこの子をして養育して存活を得せしめん、誰か能く憐愍して愛するこゝ己れが生める如くするものぞ、ミ親活したる時に五百の釋種の新婦あり、新婦等各々我能く養育せん、我能く瞻着せんミ云ひ出でたれき、釋種族彼の婦等に云ふ、汝等は一切年少く盛んにして意、色欲に耽りて能く養育して法、慈愍を加ふる能はじ、唯だこの摩訶波闍波提こそは逝母ミは姉妹にてもあり、是れこそは真正の姨母なれ、よく心して育つべしミて遂に太子を波闍波提に付屬せしめぬ。

ミ、經典に出てゐる。而してこの姨母に太子を付屬するミ同時に又別に八女人を以て太子を抱かしめ、八女人を以て太子を洗浴せしめ、八女人を以て太子に哺乳さして、八女人を以て其戲弄にあてしめた。隨分澤山のお守役なる事よ。姨母之を督して自ら抱き世にも美しく育てたのである。世尊は實にこの美しい家庭に生れ、可愛いベビーミして、成長していつたのである。

二

父淨飯王が、一日阿私陀 Asita なる者を招きて太子を相せしめた事件は萬人の知れる所である。爾來淨飯王は憂慮し

朝夕多くの妓女をして身に瓔珞を飾らしめ、更るく太子の守をさせた。太子は常に陰翳である。太子にはその後四門出遊の事がある。老病死僧……太子の人生觀はいつしか腦頭に深く刻みつけられてしまつた。一匹の死虫あり鳥來りて啄み行くを見て慈悲の念を起し、又衆生互に吞食するを覺り給ふた。又杖にたよる老人を見て老苦の厭ふべきを感じ、又病者を見て風露の命に喘ぐに心を痛ましめ沈鬱厭生の念を一層加へられた。火淨飯王又之を憂へ解語の花の慰めを思ひつかれたのである。これより太子が青春時代に入る。

三

父淨飯王が三妻を選ばれたのは太子の沈鬱性を慰めんがためで、この事については昔から異説がある。今其の一般的ものを記す事にしよう。其の一は瞿夷(Gautami (憍曇彌)又は俱夷とも明女とも譯す。第二は鹿野(Mitragata)云ひ、第三は耶輸多羅(Yasodhara)である。かくして太子は三時殿中の人となりしが併し三名は女性なるを離るべからず、三妻豈に小蛇の胸に住まざらんや。先づ瞿夷に對する太子の爭婚競技につき記さう。釋氏の中夷と稱する少女あり、端正皎潔花の容、目の眉は彼の經の記す所である。この女に八國の王、皆其の子の爲に彼の少女を求めんす。淨飯王も亦其の一人なり。八人の中に斛飯王あり又其の子提婆のために又求む。其中提婆最も有力なりしが、當時強勢を有す淨飯王の命により俱夷の父深く之を思ひ憎めり、終に爭婚競技となる。女一人に婿八人とは實にこの時の話か、太子と提婆の爭も終に太子に勝が上つた。併し之に對する提婆の執着は思ひ知られる。これ一族中の不和と所謂釋迦と提婆との確執は深くも之より萌せるは云ふまでもなからう。「月に叢雲、花には嵐、釋迦に提婆の例へあり」。後世かくも言はれる様になつたのも無論の事であらう。然れども時のチャンピオンたる太子の意はあまりにもこの女には無かりしか、太子かくて妃を迎へたれども云はゞこれ男子の意氣地よりの競ひより迎へたるもの、慾の眞味は掬せざりしか、心の奥より萌したる戀ならではそは生命ものにあらず、太子の惱みは依然として深い。又太子と美少女花賣女の話がある。其の説ま

ちく／＼なるが、此美少女は耶輸多羅らしい。然し太子は釋迦族の貴族、少女は花賣女、そこに族閥の制限、印度當時の風習を如何にせん。其故に好きローマンスの生れ出でたる事深領の至である。此に太子は天下に命令して夫人の候補者たるべき美人を城中に呼び集めた。而して選ばれたるは彼の女耶輸多羅である、かくして耶輸多羅の玉の御輿も御殿にをさまり、太子と耶輸多羅は梵天の社に献りたる花の御利益此に見えしが賤の女の服衣を解きて耶輸多羅は實に喜悅の色に満たされたのは言ふまでもなからう。が、之を觀し宮中の彩女等、群る蛇の舌燃えて蜿蜒たる髪の鬨ひ言はうか、嫉妬の角頭は今更ら鹿野の庭の垣根より表れ、慳貪の煙りは俱夷が竈より上りたる、嫉妬波の馳り、煩惱の瀨に懦弱の巖、邪見の深坑、姦佞の絶壁……を彼太子の知らざる所なるか。太子と耶輸多羅の成立を讚美し曰く、

持重有智慧 相好容貌光 名稱最第一 是故號降稱 手執波曇花 眼如紺蓮葉 兩手奉好花……………月與衆星俱

合宮盡歡喜 皆共同舉聲 稱曰眞得妃 莫不同其歡 如是歌稱聲 斯須流聞王 王聞甚歡悅 重賜名寶珍……………佛本行經は時の光景を寫して居る。

三時殿の名は、一は藍摩 Ranna 以て隆冬に擬し、二は須藍摩 Suranna 涼殿以て夏暑に擬し、三は蘇婆 Sula 以て春秋に擬せしめたのである。太子彼れまた有漏の人、一たびは痴に狂ひ、婚を爭つて競技を試み、花賣女に染著しては浮世の情味、戀の煩悶四百病の以外に詩の惱みあるを諦見して、アイヌの謡の「ペカレ、メノコト、トラセノ、モグロヌサタ、ハシクル、チチコラス」(アイヌ民謡より)云ふ如き感想を懷いたのであらう。而して新家庭の主人公、艶福の貴公子を以て自ら任じたのである。あゝ淺き夢みし太子も亦人なるか、果してかゝりしならんか。否然らず。彼英氣俊敏多感の人、萬世世界の大哲人ミ誦はるべき天才の彼、こゝに快樂の夢を覺醒すべき一念死の意義に達著したのだ。妻子眷族七珍萬寶畢竟これ何物、淺き夢見し醉もせざるに死魔闇黒の手が伸び、いろはにほへぎ、ちりぬる色は皆空なりと豪語せられし釋尊の心境は實に此所より出でし事ならん。して後に之を「但念姪佚煩滿胃中、愛欲交亂坐起不安、

乃至自妻厭憎私妄入出、費損家財事爲非法」ミ御叱り遊ばしたのであらう。兼好法師が「世の人の心、まぎはすこゝ色欲にはしかず、人の心は愚かなるものなる哉。にほひなぎは假りの物なるにしばらく衣裳に薰きものすこ知りながら、之ならぬ匂には、心こきめかするものなり。

ミ、徒然草に説かれたのも此の譯なのであらう。

あゝ宛轉たる蛾眉よく幾時ぞや。太子まさにこの曉に於て起たんす。時維十二月八日なり。太子出家の本意は只煩はしき宮中の繫縛を脱したいが爲ばかりではない。五體に燃え上つて居た求道心を満足せんが爲である。

御者車匿 Channa も健陟 Kamthapa も去つた。太子は今や眞に三界無縛の出家である。「人生は老病死の苦の世界である。富貴も榮耀もこの老病死の前に向つては何等の權威をも有しない。人は唯富貴榮耀の樂しむべきを知つて、老病死の苦しむべきを知らず、日夜營々として只夢の如き富貴榮耀を追ふのみである。けれども人生眞の幸福は決して富貴榮耀ではない。何であるか、他なし老病死の羈絆を脱することである」——是は太子の人生觀である。然らば如何にして老病死を脱離することが出来るか。換言すれば如何にせば人生眞の幸福を得る事が出来るか。之が太子の求道心の起る所以なのである。宮殿に居つては種々の煩累があつて自由に道を求める事が出来ない。そこで太子は自由に無縛の道を求めんが爲に千障萬難を排破して決然出家を斷行するに至つたものである。

四

迦毘羅城では到底太子の志を枉げる事の出来ないのを知り保護給仕に五人の太子の許へ送つた。太子は此上父王に背きかね、五人の隨從を許した。一行は歴訪生活へミ移つた。然し意に満足を得ずして自覺の第一關戸をくゞつたのであつた。して尼連禪河の東岸なる前正覺山に於て坐禪觀念の行に入つた。苦行六年一床の上に終日端坐して飲食を斷ち苦心修行をつゞけた。當時太子の胸中は何であつたであらう。坐禪觀念の晨夕に王城時代の華美の生活が夢の如く太子の

精神に浮び出ではしなかつたであらうか。寒月冷かに禪床を照す時、白髪雪の如き淨飯王の容貌は髻髻として太子の眼前に顯れはしなかつたであらうか。露にぬれた草木の花が夕べの風に吹かれてしなやかに身を顫はすとき、情に燃ゆる眸を俯せて乙女心の唯一筋に太子に寄り添つた。若き耶輸陀羅の楚々たる風姿は生けるが如く太子の心眼に寫りはしなかつたであらうか。其時毎に風無き折の湖水のやうに靜かな太子の精神も、漣の寄するが如く顫ひ動きはしなかつたであらうか。それは自由を求める爲こはいへ並大抵のこゝで無かつたであらうと思はれる。かくして幾年月の苦行に身は殆んぎ枯木の如くに瘦せ、殆んぎ足腰も立たぬ位に肉體が疲弊して居る。然れどもこの少食苦行によりて神智の靈源を覺るこゝ能はず、前正覺山の林は幾度か落葉しては又縁をまこひ、林下の草花は幾度もなく咲いては又散つたけれども太子の胸中は依然として無明の暗にこざされ妙覺の光明に接するこゝが出来ぬのである。で太子は心靈の自覺の前に肉身の壞滅を恐る。「茲に六年而かも猶解脱を得ず、畢竟自餓斷食の苦行は非道なり、如かず我まさに食を受けて然る後に成道すべし。」こゝ心期一轉太子は始めて苦行の座を立つた。して尼連禪河の洋水に身體の垢穢を洗ひ淨めたが枯木の如き身體では最早や立ち得べくもなかつた。時に林外より來れる一牧女あり。手に乳の淨瓶を捧げて立つて居る。名は難陀波羅。この女は釋尊の記傳中に特筆すべき愛の花である。今其の時の光景を筆の動くまゝに書いて見よう。彼の女淨き牛乳を淨瓶に入れ乍ら此處に通るかゝり、端なくも一人の苦行者が疲勞の餘り、打ち倒れて居るのを見て氣の毒の感に打たれ。携へた淨瓶中の牛乳を謹んで右の苦行者に獻せんとしたのである。嗚呼因縁云ふものは不可思議のものである。野薔薇の如き無邪氣な牧女は如何にして今自分の供養せんとする苦行者の運命を卜知するこゝが出来よう。彼女は唯苦行者の憫れなる有様に打たれて自ら供養せんとするの精神を起すに至つたまでである。然るに此可憐の牧女の供養せんとした苦行者は此れ決して普通一般の苦行者にあらず、始めは一城の太子として人生の富貴をつくし後には成道正覺して人天の導師と崇め奉らるゝに至つた佛世尊である。嗚呼何ぞ好個の對象ぞ。供養者は是れ花はすかしい血の燃

ゆる少女、淨瓶を捧げた手の顫にも、若き血の搖ぎを見る事が出来る。而して供養さるゝ人は六年の苦行に修行を續けた出家、肉枯れ骨立つて宛ら骸骨に皮を纏ひつけた姿、此兩人を對照して見よ。まさに是れ萬緣叢中の紅一點なるもの——絶好の詩題ではないか、畫題ではないか。太子はこの少女の供養を享けてより潑刺たる元氣は潮の如く肉體に精神に湧いて來た。是より再び新しい元氣を以て瞑想をつゞける事が出来る。太子は衷心より少女の供養に感謝し、後に「我が受けた供養の中に最も偉大なる供養をなしたものは少女難陀婆羅である」云つて居られる。又咒願を唱へ曰ふ。

今新施食欲今食者得充氣力當使施家得瞻得喜安樂無病終保年壽智惠具足。

こ。譯すれば「今この吾に施したる所の食は食する吾が身の氣力を充しむるのみならず施したる功德によりて女も喜びを得て、安樂無病で一生無難で壽を保ち智惠も具足するであらう」云ふ意である。これ感謝の呪願である。

釋迦牟尼、これより獨行して菩提樹 Bodhi-druma 下に赴き、自ら誓ひを立て、我正覺をこらすんばこの坐を去らじと決定し、かく念願して四十八日結跏趺坐して觀想せしが、其の滿願のその夜明に先だちに閃く曉けの明星、煌々として最神智の大光明を放ちて照さんとした時、森羅萬象悉く歡喜し、期したる如く太子の瞳に明星の光がピツタリ合したのである。この四十八日間は其の中に殆んど全世界の精神的事實を一つに集めて實驗したのである。全く肉と靈との争ひであり、暗と光との闘ひであり、惡と善との競争であつた。最後の一瞬間！無始の昔から太子の精神を支配して居つた肉、惡の暗等の精神が勝つか、全世界の光明ともなるべき靈、善、明等の精神が勝つか、此處が天下分目の關ヶ原である。あゝ最後の激戰！太子の胸裡はこの一大激戰の戰場となつて、明暗二面の精神の荒れ狂ふに任せたのである。魔界の大王、天魔波旬は部下を呼び額を集めて凝議しただらう。而して魔の三女を以て攻撃したのである。其の三女は妖冶巧媚、人を惑すこと天中第一、其名は一は染妃、二は悅妃、三は可樂と云ふ。次で魔十軍を卒るて太子を攻めたれご不思議にも太子の身邊より大光明が放たれ、惡魔の投する刀槍は、この光明を受けて忽然變じて紅白黃紫の花ごなり

續紛として亂れ散る。遂に惡魔退散、之にて天地は全く一變した。曉の明星と共に妙覺を得たのである。
諸法集要經に曰ふ。

女人爲罪本	能散於資生	若爲彼所伏	女人多詔曲	常懷於嫉妬	天人阿修羅	夜叉鬼神等	墮於險難中
皆由女人故	女色惑衆生	常懷其慾想	起遍計追求	其心無暫捨	無量愛欲箭	損惱諸衆生	彼樂何所之
悉見其磨滅	是欲深可畏	如利刀猛火	智者善了知	常一心防護	若有特淨戒	忽起於慾想	招無量誹謗
生衆多過患	如風觸於火	其焰則熾然	見女人生貧	定爲彼燒害	若求清淨樂	其心常寂靜	起勇猛精神
修習於勝慧	捨欲信因果	是人獲大利					

こ説いて居る。徒然草にも「事に觸れてうちあるさまにも人の心こまぎはし、すべて女のうちこけたるいもねず、身を惜しこも思ひたらず堪ふべくもあらぬ業にも、よく堪へ忍ぶは只色を思ふが故なり、ここに愛著の道其根深く源遠し、六塵の樂多しこいへぎもみな厭離しつべし、その中にたゞかのまぎひの一つやめかたきのみぞ老ひたるも若きも智あるも愚なるもかはる所なしこぞ見ゆる、されば女の髪すぢをよれる綱には大象もよく繋かれ女のはけるあしだにて作れる笛には秋の鹿必ずよるこぞいひ傳へ侍る、みづからいましめて恐るべくつゝしむべきはこの感なり」
い、のべてゐる。

五

釋尊は女を捨てゝ出家した。今天下を思惟すれば皆堅固あるなし。亦有樂なし。佛教の家庭は樹下石上である。鐵鉢一つに菰一枚實にこれシンプルライフの極みである。世に乞食云ふは之れ佛の遺法なるか。釋尊給孤獨精舎に遊べる時、波斯匿王佛に供養して其の行道を油干斛を以て紅燈を點じた。時に貧女難陀なるものがあつた。居るに舍なく食ふに食はれず云ふ有様である。で佛に供養する燈火さへあらうはすはない。併し難陀乞食をして僅に一錢を得て油を買

ひ、路に燃やして佛に供養した。其の光明晨の朝に至るもきえず、即神力を以て五恒の水を持して之に灑ぐも又消えず、大風を以てしても神力を盡くしても竟に滅する事能はざりしと云ふ。女の心、無上道を求めるが故である。これ世に所謂長者の萬燈、貧者の一燈である。

次に一寸佛教の女性觀をのべよう。

耶蘇教で天使としても貴ばるゝ女心が佛教に於ては惡魔として厭はるゝも又奇意である。耶蘇は男女を以て一體とし愛を以て生命とし相愛し相親しむべきを教ふる。然るに佛教は女人を以て地獄の使者とし、大蛇を見ることも女人をば見るべからずと教へる。凡そ女を排斥するものは佛教にしくはなく、女人を卑下するものは回教に越すものはない。かの儒教すら三舍の窮屈論を説く。雖も夫唱婦隨の掬すべきものがある。我が神道に於ては最も女を親愛する。では佛教は何故にかくも女人を排斥するか。一切欲望は皆これを罪惡と觀するからである。まして色欲に於ておやである。「闇の夜に鳴かぬ鴉の聲きけば生れぬさきの君ぞ戀しき」とは佛教の戀である。佛教の戀は「不生不滅」にある。「枯木寒巖」は其の態度である。かの清少納訂が「法師ばかりは羨ましからぬものはあらじ、人には木の端の樣におもはるゝよ」と、詳したるが、果して法師彼等は木の如く石の如く無情のものに化し得べきものか。否、木と云はず、石と云はず、木は花を開き、石は苔を生ずるに非ずや。佛教は萬有を大觀して空と説く。而かも媚眼の一色を觀じ去つて所謂「色即是空」と語り得べきか。「あはれかの六塵の樂欲は厭離しつべし、たゞ迷のみは詮かたなし」と嘆じたるは兼好法師である。

あゝかの女人をば地獄の使大蛇と見、女人に一盼を與ふべからずと説く佛教は女人の敵であり、また人道の賊である。然れども、然れども、諸兄よこれは今日日本佛教の事ではない。驚く必要は萬以て無い譯である。